

論文審査の結果の要旨

平山昇

本論文は、現在の日本に見られる初詣、すなわち正月三ヶ日における不特定の社寺への参詣慣習に関する初めての体系的歴史研究である。この新年参詣については、従来、政府がナショナリズムを庶民に浸透させるために創出したものであり、その淵源は天皇の四方拝にあると見なされてきた。これに対し、この研究は、明治 20 年代から昭和前期に至る新聞記事等の精査を通じて、そのいずれもが誤りであり、初詣は東京・大阪の庶民が近世から行ってきた正月参詣の慣習が再編成されたものであって、鉄道会社が大都市庶民のレジャー欲求を掘り起こして郊外の社寺に誘引したことに起源があり、かつ当初はこれを下層民の迷信として見下していた知識人が明治神宮の創建を機としてこの慣習を受け入れ、それによって「国民的」な年中行事に転化しことを明らかにした。官が「上から」政策的に創りだしたものではなく、資本と庶民が娯楽という非政治的動機によって「下から」創出し、それに知識人が参入し、その意味を捉え返したことにより、結果としてナショナリズムを支え、表現する代表的慣習となったというのである。

全体は 3 部からなり、これに序論と結論が付されている。第一部では初詣の起源を扱う。第 1 章では、明治期の東京で郊外の川崎大師に正月元旦に鉄道に乗って詣でることが始まり、やがてそれが「初詣」と表現されるようになったことが示される。東京の庶民は従来、招福攘災のため市内の社寺に正月参詣をしていたが、それは特定の日取りと方角（恵方）という縁起によって決められていた。しかし、明治 20 年代には恵方や縁日と関わりなく、鉄道によって郊外の川崎大師に元旦に参詣する人々が増加し、それは他の鉄道沿線にも広がった。これは、ハレの日にちょっと贅沢をして行楽に出かけたいという庶民の欲求を鉄道会社が巧みに捉えたからで、川崎大師の場合、複数の鉄道会社がアクセスを提供するようになると激烈な集客競争が始まり、参詣客はウナギ上りに増加したという。第 2 章では、関西の事例を比較に取りつつ、「恵方」の変化を論ずる。関西では正月ではなく節分の恵方詣の方が盛んであったが、ここでも鉄道の発達とともに郊外への参詣が盛んになり、やがてそれは年頭参詣にも拡張された。また、東西とも鉄道会社は当初「恵方」の活用に努めたが、方角の変動のない「初詣」の方が都合が良かったため、「恵方」による宣伝は廃れていったという。

第二部は、明治天皇の崩御がもたらした衝撃を論じ、知識人の参入によって初詣がナショナリズムと接合したことを論ずる。第 3 章はその前提として、まず明治天皇が危篤とな

った際に突発した二重橋前の平癒祈願が知識人に与えた衝撃を分析する。知識人たちは土下座その他、漢学的・洋学的教養からすると異様で野卑な庶民の行動に戸惑いながらも、その天皇を思う「真心」「至情」「赤誠」、すなわち〈感情美〉に打たれ、庶民との精神的一体感を抱くようになったという。この時、天皇への崇敬行動は、クリスチャンのそれを含めて〈形は様々／心は一つ〉であった。これに対し、崩御後に明治神宮の創建が始まった後には、〈感情美〉は〈形も心も一つ〉という偏狭なものに変わった。東京朝日新聞はその投書欄で陵墓の代わりに神社を東京に設けることについて議論を喚起したが、論争の過程で建設反対派は〈感情美〉の共同体から排除され、その結果、明治天皇への崇敬行動は神社に独占されることとなった。第4章は、初詣に戻って、明治天皇崩御の別の遺産、すなわち天皇と国家を崇敬しながら、神社にはなじみがなかった知識人たちが、明治神宮には参詣を始め、それに伴って初詣にも加わり始めたことを明らかにする。明治天皇の大喪から大正大礼を経て昭憲皇太后の大喪に至るまで神道式の国家儀礼が連続的に執行され、マスメディアで報道される中で、神道に違和感をもっていた知識人も「国民」として神社に参拝するようになった。その際、従来「迷信」とされていた初詣は〈感情美〉の現れとして肯定的に読み替えられ、さらに家庭的な年頭行事として子供連れで励行されるようになった。こうして、明治神宮への初詣は「社会のあらゆる階級が同列になって同じことをする」行事として盛況をみるようになった。それは多様な休暇慣行の中に生きていた人々が正月三ヶ日には一斉に休みが取れたからでもあったという。

第三部は、「国民的」行事となった初詣が鉄道資本の集客戦略によってますます盛況を見る一方、これが娯楽よりナショナリズムの文脈で語られることが多くなったことを論ずる。第5章は、関西の私鉄と国鉄が伊勢・橿原・桃山など天皇家ゆかりの地を「聖地」と名づけ、その巡拝を初詣に組込んで激しい競争を展開したことを示す。鉄道会社としては、「聖地」は有名寺院やスポーツと並ぶ経営資源であって、初詣の行楽面への着目は神社界の宗教的な捉え方とはズレがあった。とはいえ、鉄道による「聖地」への勧誘は、現地体験を無二の価値とする言説を生み、さらに参拝者の増大それ自体が「国体」の尊厳の証明とされるに至る。この言説は翻ってさらに鉄道会社の集客にも貢献した。娯楽の需要とナショナリズムが鉄道の経営戦略を媒介にプラスのループを生み、それが結果的に国家神道の国民への浸透を促したというのである。最後の第6章は、戦間期の東京に舞台を移す。関東大震災が市内の社寺を破壊し、西部に市域が拡張された結果、東京の初詣は明治神宮と郊外の寺社という組み合わせとなり、複数の鉄道の競争が川崎大師と成田山という寺院を抜きでた参詣先に押し上げた。他方、戦間期には、初詣を国家神道と結びつけて語る言説も流布した。初詣を天皇の四方拝と結びつけ、さらに太古からの伝統として語る言説が登

場したのである。交通業界のガイドブックは、総論でこの枠組を取入れ、国家神道の行事として解説しつつ、本文では寺院の行楽地としての適性も述べるという使い分けをして対処したと指摘する。

さて、本研究は、「初詣」に関する初めての体系的な研究であり、鉄道会社の経営戦略がその成立と発展に決定的な役割を果し、かつ知識人の参入がその「国民的」年中行事への転化、さらに国家神道との接合の関門となったという事実を見出して、従来の理解を大幅に書換えた。関連する宗教史や鉄道史の分野に対しても新たな光を投げかけている。国家神道の研究においては従来、「官」が軍隊や学校などの制度や村落共同体を通じて国民を組織した面が注目されてきたが、大都会の初詣慣習の形成過程を取上げることによって、別の併行する回路の存在が明らかとなった。また、鉄道史においては従来、阪急と宝塚の関係のように、郊外鉄道がモダニズムの導入者となった面が注目されてきたが、「聖地」巡礼のような伝統の再編成の機能も果したことも明らかとされた。

しかし、本論の意味は近代日本の一習俗の研究というに止まらない。その第一は、ナショナリズムを枠づけ、再生産する事象が、〈上〉からの誘導・注入だけでなく、〈下〉からの、しかも非政治的動機によっても起動され、それが〈上〉からの意味づけによって強化され、また〈下〉に環流してゆくという一般的洞察を提示したことである。「国民」的行事が、「官」の政策でなく、郊外鉄道や新聞広告といった近代的メディアの経済的動機の意図せざる結果としてもたらされたという解釈は、他の社会にも通用する普遍的価値のあるものと思われる。第二には、昭和前半期におけるナショナリズムの暴走の精神的背景を示唆した点である。明治神宮創建論争において〈感情美〉という論拠が理性による反対論を排除し、それがさらに神社と排他的に結びつけられた。〈感情美〉を絶対化し、「理屈」を排除して天皇への絶対的帰依を求めるといった知的空気が昭和前半期の日本を支配したことはよく知られているが、本研究はその起源とメカニズムを明らかにしたのである。

しかしながら、本研究も瑕疵なしとしない。第三章が全体からやや浮いていること。農村部における初詣や国家神道の浸透について言及を欠くこと。さらに〈上〉の知識層と「下」の庶民という形で、対象の構成を固定的に捉えていること。しかし、これらは、本研究が明晰な叙述をもって示した独創性、近代思想史への貢献、そして普遍的洞察を考えると、取るに足りないことと思われる。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。